

# モーツァルトの演奏会用アリア II

森 久見子

## Mozart's Concert Arias II

Kumiko MORI

### 緒 言

モーツァルトの演奏会用アリア第Ⅰ部の研究を基にして、演奏体験のあるアリア K505「どうしてあなたを忘れましょう！ 恐れることはない愛する人よ (Chio mi scordi di te!/Nontemer amato bene)」の作品分析を行うことにした。

アリア K505は、アリア K 490からテキストを得ている。この作品分析においては、まずアリア K490が差し替えられたオペラ「クレタの王イドメネオ (Idomeneo, Re di Creta)」について調べ、テキストの背景を識り、捧げられた歌手、テキストの内容、楽曲分析、演奏について述べることにした。楽曲分析はバーレンライターの新全集で行った。

### 作 品 分 析

アリア K505は1786年12月26日に完成し、翌年1787年2月23日に初演された曲で、ソプラノ歌手ナンシー・ストラージェに捧げられた。華やかなフィオリトゥーラを見せるのではなく、彼女の声に合った叙情的な曲である。オブリガートのピアノが常に歌と対話をするようにからみ合い、オーケストラ伴奏による歌とピアノのデュエットの形をとっている。

#### 1 「クレタの王イドメネオ」

アリア K505 のテキストはモーツァルトのオペラ「クレタの王イドメネオ」の差し替えアリア K490と同じものを使っているが作者は不明である。ここでオペラ「クレタの王イドメネオ」と、アリア K490が差し替えられた場面（第2幕第1場）についての概要を述べておく。

台本はジャンバッティスタ・ヴァレスコ (Abbate Gianbattista Varesco 1736-1805) で、1781年1月に完成、1月29日にミュンヘンで初演された。同年秋にウィーンで上演されることになり、歌詞はドイツ語に訳され、大々的な改編が計画された。さらに1786年ウィーンのアウエルスベルク侯爵 (Fürst Karl Joseph Auersperg 1720-1800) の私邸において演奏会形式で演奏された時にもかなり手直しされ、重唱 K489「私には言葉で言えません (Spiegarti non poss'io)」と、アリア K490「もういいのです、すべてを聴いてしまったら、恐れることはない愛する人よ (Non piu tutti ascolta/Non temer amato bene)」の2曲が加えられた。

アリア K490が差し替えられたのは10曲目のアルバーチェのアリアである。クレタの王イドメネオが腹心の臣アルバーチェに秘密を打ち明け助けを求めた。イドメネオの苦悩は、トロヤ戦争で勝ち船隊を率いて帰国する途中、突如激しい嵐に遭遇した。その折海神ネプチューンに、無事に帰国できた時には一番最初に出合った人物を生けにえとして捧げるという誓をたて難を

逃れた。しかし一番最初に出会ったのが自分の息子イダマンテであったということである。そこでアルバーチェはイドメネオに忠誠を誓い、イダマンテを海神の目の届かない所に隠しておくように勧める。この曲はごく定型的なものとして評価も低く省略され、替りにアリア K490がイダマンテによって歌われるようになった。イダマンテ役はカストラートが演じていたが、カストラートは主にイタリアで盛んであり、ウィーンで上演された時はテノールが歌った。現在ではカストラートは存在しないのでテノールが演じるものが普通である。

## 2 ナンシー・ストラージェ

ストラージェはイタリア人の父とアイルランド人の母との間にロンドンで生まれた。父はイタリアからイギリスへ移住したコントラバス奏者であった。兄のステイーヴン・ストラージェ (Stephen Strace 1762-1796) は作曲家で、ウィーン滞在中はモーツァルトに師事していたと言われている。彼女は1778年よりイタリアへ行きアントニオ・サッキニー (Antonio Maria Gaspare Sacchini 1730-1786) のもとで声楽を学んだ。その後フィレンツェ、ミラノ、ヴェネツィアを経て1784年よりウィーンで活躍し、1787年ロンドンに戻った。アリア K505の初演は彼女がウィーンを去る告別演奏会であった。その時のピアノはモーツァルト自身が弾いたが、この曲は音による愛の告白であるとして論じられてもいる。彼女はモーツァルトのオペラ「フィガロの結婚 (Le nozze di Figaro)」の初演 (1786年5月1日) でスザンナを好演しており、歌手として非常に優れた才能を持っていたと同時に才色兼備であったと言われている。

## 3 テキスト

Chio mi scordi dite?	私は忘れられるでしょうか？
Che a lui mi doni puoi consigliarmi?	私の愛をあの人にあげることを勧めなさいますか？
E puoi voler che in vita?	それでも私に生きよと？
Ah no. Sarebbe il viver mio di morte assai peggir.	できません。私が生きるのは死より恐いことでしょう。
Venga la morte, intrepida l'attendo.	死がきてもよい、死を待っています。
Ma, chio possa struggermi ad altra face, ad altr'oggetto donar gl'affetti miei, come tentarlo?	けれども私の愛を他の人に捧げることなどできますか。できません。
Ah! di dolor, morei.	ああ、苦しみで死んでしまうでしょう。
Non temer, amato bene, perte sempre, sempre il cuor sara.	恐れるな愛する人よ 私の心はいつもあなたのためにあるでしょう。
Piu non reggo atante pene, l'alma mia mancando va.	私は沢山の苦しみに耐えられないでしょう 私の魂は消えてしまう。
Tu sospir? o duol funesto!	嘆きますか？ 残酷な苦しみ！
Pensa almen che istante e questo!	私がどのようなか考えてくださらないのですか！
Non miposo, oh Dio! spiegar, no ah no! ah nonmi posso, oh Dio! spiegar	自分自身にも説明ができません、神様！
Stelle barbare, stelle spietate!	残酷な星 (運命の星) 無慈悲な星！

perchè mai tanto rigor? perchè!

どうしてこんなに苦しまねばならないのでしょ  
う!

Alme bene, cheve dete le mie pene in tal  
momento, dite voi, sequal tormento puo  
soffrir un fido cuor?

気高い心よ、このような私の苦しみを見ている  
時、おっしゃってください。忠実な愛はこのよ  
うな苦しみに耐え忍ぶことができるのですか?

#### 4 レチタティーヴォ

レチタティーヴォ・アコンパニャート アンダンティーノ  $\frac{4}{4}$  27小節 伴奏：弦楽器群

前奏は2小節と短かく、歌への導入部的な機能を持ち、符点音符とスタッカートで軽い問いかけをしている。(譜例1)

#### 譜例1

Recitativo  
Andantino

Violino I  
Violino II  
Viola  
Soprano  
Violoncello e Basso

Ch'io mi scor-di di te?

調号は書かれていないが、これは調性が次々と変化しているためであろう。変イ長調で始まりすぐに平行調であるへ短調になる。第1ヴァイオリンが19小節までオブリガートの役で歌とかけあい、チェロとバスがバツソコンティヌオの役割を果している。11小節よりテンポはアレグロ・アッサイに変わり、調性は二短調から突然変口長調になる。(譜例2)

#### 譜例2

Allegro assai

vi-ta... Ah no. Sa-reb-beil vi-ver mi-o di morte as-sai peg-gior.

この部分で第1ヴァイオリンに新しいモチーフが現われて3度くり返され、変口長調からト短調一変ホ長調と転調して、長3度下へのゼクエンツになっている。また音の色彩は変化し、テキストも「Venga la morte, intrepida l'attendo」と感情の高まりを感じさせるものである。20~21小節では伴奏がそれまでの旋律的なものから和声的になり、テキストは非常に深刻な内容を持ち、レチタティーヴォの一番重みのかかった部分をかたちづくる。(譜例3)

譜例 3

23小節よりテンポがアンダンテになり、「Come tentarlo?」を2度くり返すことで憤どおりを感じさせ、調性はヘ短調—変イ長調—ハ短調さらにト短調の和音を経過して、「morire」という言葉を最後に変ホ長調のアリアに入る。（譜例4）

譜例 4

5 アリア

ロンド アンダンテ  $\frac{2}{2}$  変ホ長調 219小節 伴奏：クラリネット (B) 2, ファゴット 2, ホルン (Es) 2, 弦楽器群, オブリガートのピアノ

不均等な2つの部分で構成されている。第1部はA-B-A'の3つの部分からなる。第2部は一旦第1部と切り離してみると、A-B-A'-C-A''-D-Codaという古典的なロンド形式に近い形をもっている。第1部と第2部を通して考えるならば、第2部の最初のテーマAは第1部のBに続く第3のテーマ、すなわちCとしなければならない。このように考えたうえでこのアリア全体を見るならば下記の通りになる。( )内の数字は小節数を示す。

第1部 (73) A(33)-B(22)-A'(18)

第2部 (146) C(16)-D(12)-C'(9)-E(44)-C''(10)-F(30)-Coda(25)

第2部は第1部の2倍あり、第3テーマであるCが3度現われる。さらにこのアリアのクライマックスでもあり、また展開部ともいえる重点がおかれたEがある。したがってこのアリアは第2部の方に主体がおかれているといえる。

レチタティーヴォが終ると直ちにアリアの序奏が始まる。31小節からピアノで第1テーマが提示され、歌に入りテーマが拡大されていく。穏やかな旋律で歌の音域もソプラノとしてはやや低く華やかさはないが、情緒豊かに美しく歌われることによって印象づけられる。（譜例5）

56~58小節では減七和音が連続し、歌の旋律も半音階のため不安定な響きを与え、その後なだれ落ちるように一気に下降しカデンツを形成してBに入る。愛らしい第2テーマがやはりピアノで奏され、すぐ歌がそれに応答しているように現われる。このような歌とピアノの応答や、からみ合いは随所で見られる。（譜例6）

A'ではピアノの躍動的な三連符に、テキストは「Stelle barbare, stelle spietate perche mai tanto rigor?」で1つのクライマックスを作り、第1部が終る。第2部の初めCは柔かい第3

譜例 5

**RONDO**  
Andante

Clarineto I, II in Sib/B  
Fagotto I, II  
Corno I, II in Fb/Bb  
Violino I  
Violino II  
Viola I, II  
Soprano  
Pianoforte  
Violoncello e Basso

Non te - mer, a - ma - to be - ne,

per te sem - pre, sem - pre il cor sa -

譜例 6

va, man - can -

do va. Tu so -

spi-ri? o duol fu-ne-stol Pen-sa al-men,

テーマがピアノで奏され歌が入る。(譜例7)

譜例7

sem - pre il cor sa - rà.

Stel - le bar - ba-re, stel - le spie - ta-tel per - chia

mai tan-to ri - gor? tan - to ri - gor?

Al-me bel - le, che ve - de - te le mie pe-ne in tal mo - men - to, di - te -

D は第1 エピソードの部分で終りは主音に解決しているが、これは1つの大きな緊張緩和であり、次に再び現われる第3テーマに安定感を与えている。(譜例8)

譜例 8

Example 8 shows a vocal line and piano accompaniment. The vocal line has two staves of music with lyrics: "voi, se-gual tor-men-to può sof-frir un fi-do cor? Di-te" and "voi, se-gual tor-men-to". The piano accompaniment consists of two staves, with the right hand playing a complex, flowing melody and the left hand providing harmonic support.

E で調性は安定性を欠き、借用和音が続く。テキストは A' のクライマックスと同じもので、この曲の最大のクライマックスの始まりとなる。E は主要なエピソードである。(譜例9)

譜例 9

Example 9 continues the vocal and piano parts. The vocal line has two staves of music with lyrics: "frir un fi-do cor? Stel-le bar-ba-re," and "stel-le spie-ta-tel per-chè mai tan-to ri-". The piano accompaniment continues with two staves, maintaining the complex texture from the previous example.

C" でも第3テーマは正確に再現され、第3エピソードである F に入る。チェロとバスの8分音符の刻みにのり、テキストの「Alme belle che vedete le mie pene in tal momento, di te voi, Sequal tormento puo soffrir un fido cuor?」がくり返されコーダに突入する。(譜例10)

譜例 10

Example 10 shows the vocal line and piano accompaniment for the final section. The vocal line has two staves of music with lyrics: "Al-me bel-le, che ve-de-te le mie pe-ne in tal mo-". The piano accompaniment consists of two staves, with the right hand playing a complex, flowing melody and the left hand providing harmonic support.

コーダのテキストは F と同じで声の技巧を駆使しつつ徐々に盛り上がり、カデンツを作り、華やかに歌い終る。(譜例11)

譜例 11

The musical score for Example 11 consists of two systems of staves. The first system includes a vocal line with lyrics "cor, un fi-do cor, un" and piano accompaniment. The piano part features a prominent, rhythmic accompaniment in the right hand and a more active bass line in the left hand. The second system continues the vocal line with lyrics "fi-do cor?" and the piano accompaniment. The score includes dynamic markings such as *p* (piano) and *cresc.* (crescendo), and a fermata over the final note of the vocal line.

## 6 演奏

演奏会でアリア K505 を聴いたのは1978年に来演したジョーン・サザーランド (Joan Sutherland) のピアノ伴奏による演奏だけである。伴奏者のリチャード・ボニング (Richard Bonyng) はベル・カント全盛時代の研究者であり、サザーランドのご主人である。サザーランドはリックの流れを継承したベル・カント歌手である。無理のない美しい演奏であったが、



詳細については記憶していない。

筆者はエリザベート・シュヴァルツコップ (Elisabeth Schwarzkopf 1915-) と、シルヴィア・シャシュ (Sylvia Sass 1951-) の演奏するレコードを所持している。

シュヴァルツコップはモーツァルトを得意なレパートリーのひとつとしている。彼女の演奏については、演奏会やレコードで接する機会が多く、アリア K505の演奏についても大体の予測をすることができた。円熟味のある個性的——彼女のどの演奏にも共通している独特の個性とも言える唱法も含む——な演奏で、偉大なキャリアを感じさせる。レチタティーヴォで表現がややオーバーであったり、アリアではボルタメントが多すぎるのがあっても“シュヴァルツコップのモーツァルト”は損われていない。モーツァルトの芸術の中に彼女が入りこんでいるのではなく、シュヴァルツコップの芸術の世界にモーツァルトが存在する。

シャシュについてはオペラ・アリアのレコードを聴いただけで、その限りにおいてシャシュとモーツァルトとは結びつかなかった。しかしアリア K505を聴きモーツァルトに対する強い前向きの姿勢がうかがえた。初めて聴いた時に感じたテンポの遅さ、16分音符の不正確な箇所は否めないが、小細工のないストレートな表現、むらのない音色は、彼女の歌うオペラ・アリアからは想像もつかない演奏である。

シュヴァルツコップはリリック・ソプラノ、シャシュはドラマティック・ソプラノと二人の声質の異いやモーツァルトの音楽に対する立場の違い、さらに年令からくる音楽体験の違いなどが演奏に明確に現われており、非常に興味深いものである。

筆者はこの曲をステージで3度演奏した。その度に次の2つのことを念頭に置き音楽を作っていくようにした。ひとつ 初めて練習に入った時、レチタティーヴォのドラマ性がしばしば正統性を欠き「ワグナーではありません」と注意を受けたこと、もうひとつはゲルハルト・ヒュッシュ (Gerhard Hüsch 1901-1985) が「ドイツ歌曲解釈」の授業で次のように語られたことである。「モーツァルトの音楽は、花にたとえると大輪の花ではなく、いくつかの小さな花である。また当時の気風は、例えば失恋したり嫉妬で気が狂ってしまいそうな状態であっても陰湿なものではなく、すぐ何かに目を輝かせたり、胸をときめかせるというようなものである。」

この曲を捧げられたストラチエが抒情的な歌手であったことから、華やかなフィオリトウーラを加えることはされない。シュヴァルツコップとシャシュは99小節で装飾音符を付けているだけである。筆者の場合は指揮者の同意を得て装飾音符を付けずに歌った。

(譜例12)

譜例 12

オリジナル



シュヴァルツコップ



シャシュ



長いフレーズではテキストを付け替えたり、母音だけで歌うことも可能である。前述三者の229~239小節の演奏を示しておく。(譜例13)

リリー・レーマン (Lilli Lehmann 1848~1929) はモーツァルトが歌手に与えた自由とは、良いイタリア様式で演奏するための優れた感覚と、芸術家として習得すべき知識が必要である。さらに指揮者 (あるいは伴奏者) との申し合せにより、美しい芸術を危険にさらさないように演奏に臨まなければならない。このことはモーツァルトの芸術を正しく理解したうえでの自由

譜例 13

オリジナル

オリジナルの楽譜。上段はメロディ、下段はピアノの伴奏。歌詞は「puo sof-friv un fi - do cuor un」。

シュヴェルトツコップ

シュヴェルトツコップの楽譜。上段はメロディ、下段はピアノの伴奏。歌詞は「puo sof-friv un Ah cuor un」。

シャシュ

シャシュの楽譜。上段はメロディ、下段はピアノの伴奏。歌詞は「puo sof-friv un fi Ah cuor un」。

筆者

筆者の楽譜。上段はメロディ、下段はピアノの伴奏。歌詞は「puo sof-friv un fi - do cuor Ah un」。

であり、レーマン自身声楽家であったことから指揮者（あるいは伴奏者）のカラーだけで音楽を作りあげないように歌手への警告と受けとめた。またレーマンはその芸術が必要とする全てのことを十分に表現するために母国語であるドイツ語で歌うことを望み、モーツァルトの演奏会アリアにオリジナルのイタリア語に正確に対応するドイツ語の歌詞を作った。

結 語

1 個の作品をいろいろな側面から深く考察したことは、これまで気付かなかったモーツァルトの音楽の秘密を解くことになった。それを今後の演奏に反映させたいと願うものである。

文 献

- 1) 最新名曲解説全集22 声楽曲Ⅱ, 音楽之友社 (1981)
- 2) 標準音楽辞典, 音楽之友社 (1966)
- 3) Neue Mozarts Ausgabe Arien bandⅢ, Bärenreiter Kassel (1971)